
Brunch

清瀬 柚李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B r u n c h

【Nコード】

N 0 0 3 6 I

【作者名】

清瀬 柚李

【あらすじ】

寒空のロクシエ。独り暮らしを始めるトレイズの為に買い物に付き合うリリア。そこで再会したのはかつての親友メグ。さあ、リリア。素直に甘えてみなさい。

（前書き）

前作「Afternoon」の続編です（＾０＾）

矛盾は気にしないで頂けると嬉しいです。

暑さも息を潜めた。

肌寒い風が吹く道を歩く端から見ればカッパルに見える短い黒髪と柔らかく揺れる栗毛。

肩を並べて歩く二人に剣呑な空気は無い。

「他に買うものは？」

「ん…無い、はず」

「ならクレープ食べたいから付き合って」

「…この前も食べてなかった？」

「そうだっけ？…まあいいのよ。美味しいから。一口あげようか？」

「遠慮します」

両手に紙袋と薄い手提げ鞆をさげて苦笑いを浮かべる。

母親に似て意思の強そうな瞳を少し細め、リリアは美味しいのに、と囁く（うそぶ）。

これは彼女なりの気遣いだつと気付いて内心あちゃー、とトレイズは頭を抱えた。

王子として生まれ、しかし伝統に則り（のつと）双子の姉、もしくは妹に国を預け小さな村で育ったトレイズは最近やっと独り暮らしが実現した。

と言うのも、国王と王妃の過保護っぷりがトレイズの独り暮らしを許さなかったからだ。

自分がお腹を痛めて産んだ子を心配するのは当たり前の話だとしても、両親の愛は異常だ。

姉、もしくは妹のメリエルの助けによって晴れて自由の身になった。

その時の話をする度に、トレイズの目は遠くなるのだが、リリアがあえて深くは聞かないのがせめてもの救いだ。

日用品から整備用の部品まで揃う大規模なショッピングモールで買い物を済ませた。遅めの昼食の前にクレープを食べようとするとリリアに呆れた。これから冷え込むであろう空を仰ぎ空気を胸一杯に吸い込んだ。今、この時全てが何処までもリアルだ。

もう隠す必要も無い。

リリアへの気持ちも、自分の立場も。

そんな、自由で、ほっと息が抜ける、狭い道から抜け出した様な解放感が、ヘタレなトレイズを後押しした。

穏やかで、幸せとも言えるこの時間にトレイズは目を細めた。

「ねえトレイズ、聞してるの？」

「はいはい、聞いてるよ」

「嘘つき」

「ついてません」

「なら私が何て言ったか言ってみなさいよ」

「……すいません」

「…やっぱ」

不機嫌そうに唇を尖らせるリリア。
苦笑してリリアの耳元で囁く。

途端に真っ赤になって睨んでくるリリアが酷く可愛い。

「リリア、カフェか喫茶店にしない？」「…なんでよ」

まだ僅かに頬が赤い。

「寒いしさ、そろそろお昼にしようよ」

「えー…。クレープ…」

恨めしそうにクレープ屋のよく言えば華やか、悪く言えば無駄に派手なワゴンを見つめる。

そんなにクレープが好きなのか、とトレイズは若干複雑になる。

まずここでクレープを買えば、リリアは確実にクレープに夢中になる。

つまり、全く話を聞いてくれない。

それはなかなか寂しいのだ。

しかも、大荷物を抱えた自分は面倒だから買わないし、第一寒い。押し殺してはいるが、空腹を訴える虫の声がいい加減、煩い。

「クレープなら食後でも買えるでしょ？どうせ僕の奢りなんだし」「まあ…それもそうね」

否定しろよ、と半目で訴えるトレイズの視線は気付かれない。

「どこがいいかしら。トレイズ、どこかい所知らない？」

「んー？…お、わりと近くに小さい喫茶店があるらしいよ。」

ミルクティーとカレーフレーバーのマフィンが美味しいらしい」

「…何その微妙な組み合わせ」

「まあ、サンドイッチくらいあるでしょ。…ご案内しても？」

「よろしく」

やっとワゴンから目を話したりリアに安堵して、エスコートを試みるトレイズ。

再び連れ立って歩き始める二人を偶然見つけ、本人かどうか見極めていた女性にしてはあどけなさを残した少女が意を決して、連れが止めるのも構わず声を掛けた。

「リア？」

鈴のように澄んだ、巧く腹式呼吸の出来たよく伸びる声。

リアの関心をトレイズから引き剥がすのには十分だった。

栗毛を揺らして振り返り、少し見開いた茶の瞳が直ぐに楽しげに細められる。

「メグ」

優しい、親しみの溢れる柔らかな笑顔だった。

喫茶店の一角にて。

きやいきやいと騒ぐリリアと黒髪を二つにゆるく結った少女、メグ。

少し不機嫌そうに目を細めるトレイズと一見無表情だが、内心かなり落ち込んでいる、しかしかなり容姿端麗な黒髪の少年、セロン。

「ほんと、メグに会えるなんて思わなかったわ!」

「私ですよ、リリア。私とっても嬉しいです」

メグは随分とロクシエ語が上手くなった。

同じ川向こう出身（正確にはイクス王国だが）のトレイズは寂しいような、少し嬉しいような不思議な感覚に襲われていた。

しかしそれ以上にせつかくの二人っきりのランチをいともあっさり打ち切られてしまった事に、少なからず虚しさを感じていた。

それはメグの連れ、セロンも同じらしい。

その証拠にふと目が会った際に「お互い、苦労しますね」と同情の眼差しを感じる。

トレイズは「お互い様ですよ」と小さく頷き返す。

小さな友情が生まれそうだ。

おすすめの熱いミルクティーが四つ、湯気をたてる。

カレーフレーバーのマフィンではなく、かぼちゃと胡麻のマフィンを頬張りながら楽しそうにお喋りに花を咲かせるリリアを眺めながらトレイズはやはりおすすめのマフィンではなく、クラブハウスサンドをかじった。

「で、そっちはデート?」

にんまりと微笑みながらリリアがメグの顔を覗き込む。

「違います！セロン君にはお買い物に付き合ってもらっただけですよ」

「……………」

（あ、停止した）

真っ向から否定されて停止したセロン。

それを哀れみを込めてちらりと見やるトレイズ。

しかし、興味を失ったのか視線を外してミルクティーを啜る。

ふうん、と曖昧に相槌を打ってリリアもミルクティーを啜る。

マフィンには既に無い。

「では私も聞きます。リリア達はデートですか？」

「まあ、そうね」

「ぶっ」

さらりと爆弾を放つリリアにトレイズが噎せる。

あら大丈夫？と白々しく尋ねるリリアを軽く睨みながら、トレイズは席をたった。

「大丈夫ですか？」

心から心配そうな声音で、申し訳無さそうな表情で尋ねてくるメグに曖昧に笑って軽く手を振り、店の奥へ消えていく。

「……………女ったらし」

「リリア、それは違います。今のは背中を擦ってあげるべきですよ」

「そう言うものの？」

「そう言うものです」

「…まさかメグに恋愛でアドバイスを貰う日が来るとは思わなかったわ…」

「そうですか」

涼しい顔で温みかけたミルクティーを啜るメグを、リリアは頂垂れながら上目遣いに見て、剥れた。

それからトレイズが帰ってきて、ようやく復活したセロンと支払い、二組のカップルは別々の方向に歩き出した。

メグとセロンは映画に、リリアとトレイズはクレープ屋のワゴンに。

「トレイズ君」

支払い中、セロンが話し掛けてきた。

同世代と言うことで、いや、それ以上に同じ境遇で頑張る仲間として敬語はお互いに控えた。

「なに？」

「シウルツさんは少し鈍いけど、君の愛はちゃんと感じてるよ」

「……」

「お邪魔して悪かった。お互い、頑張ろう」

暫く瞬きを繰り返していたが、トレイズは不敵に笑って力強く答えた。

「もちろん」

メグも、リリアに同じ話をしていた。

「リリア」

「ん？なに？」

「貴女は鈍いです」

「はあ」

「気が利きません」

「……はい」

「でも貴女は愛されています」

「……はい。……へ？」

「とにかく、貴女は愛されているのですから、自信を持って、極たまあに返せばいいのです」

しつかりと手を握って、目を真っ直ぐに見つめて真剣に言う親友の気持ちは痛いほど伝わった。

「分かってるわよ、メグ。こう見えても、長い付き合いなのよ」

二人同時に吹き出した。

二人はトレイズとセロンが来るまで、昔のように笑い続けていた。

「ん」

「……ん？」

悩み、悩み続けたあげく、たっぷりの苺とブルーベリー、クランベリーなどを甘さ控え目な生クリームで包み込んだクレープを子供のように口一杯に頬張っていたリリアが唐突にかじりかけのそれを

差し出した。

隣で缶コーヒーを手持ち無沙汰に弄っていたトレイズは意図が分からず首を傾げた。

「食べる？」

「…いや、いいよ」

じつ、と見詰めてくるリリアに何か言ってしまったか、と必死に思考を巡らせても、心当たりが無い。

「食べない？」

「遠慮します」

「食べなさいよ」

「だからいいって」

「食べなさい」

「…命令形…」

仕方無く一口かじった。

口一杯に甘さが広がる。

美味しい、と素直に思った。

同時に甘い、とも。

「美味しい？」

「うん、美味しい」

「そう」

よかった、と聞こえてきそうな程緩んだ口元にクリームが付いている。

軽く目を伏せて嬉しそうにまた一口食べる。

「でも、甘い」

「…、当たり前よ、クレープなもの」

咀嚼し、飲み込んで、無防備に振り向く。

その口元のクリームを人差し指で掬って、舐めとる。

「このくらいで十分」

ぽかんとしていたリリアの頬に赤みが差す。

「……ッばっ、！」

「さて、帰ろうか」

よっこらしょ、と立ち上がって山ほどある荷物を抱える。

「……………うん」

俯きがちに頷いて、トレイズの左側を歩き始める。

左手の荷物を右手に持ち変えて、リリアの手を握る。

一瞬肩が跳ねた。

しかし、それだけだった。

片手に大荷物を抱えたトレイズと、クレープを握り締めるリリア。

この手が離れる事の無いよう、トレイズは少しでも強く握った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0036i/>

Brunch

2010年12月31日14時34分発行